

楯円球賛歌

町田 大介

本年九月にラグビーの『ワールドカップ』が開かれる。アジア王者のジャパンは、4回連続出場で、強豪国を破って決勝トーナメント進出の期待がかかる。

意外なことに、他のスポーツが軒並み隣国・韓国に苦戦する中、ラグビーは「驚くほど」圧勝している。これは、競技人口が多く、高校―大学―社会人を貫くシステムが機能していること、そして外国選手の取り扱いがオープンで、日本は上手に利用している結果ではないか・・・

これは、二十数年前に実際に起こった「楯円球」に格闘した男と、それに魅せられた女の話である。

一

正月としては異例の暖かさであった。一九九九年一月二日。ところは東京代々木の国立競技場。午後三時を過ぎると、メイン・スタンド側は完全に日陰に入ってしまった、ラグビー観戦に付き物の寒気が序々に襲ってきたようだ。幸い、わたくしの座るバッグ・スタンド側は陽の光はそれほど弱っていない。試合は「熱い時間帯」を迎え、観客はグラウンドに集中していた。

第二試合は、関西の雄・同社大学と関東の強豪・明治大学の激突で、後半十分に差し掛かっていた。決勝戦への進出をかけたどちらも負けられない！

既に、第一試合では早稲田大学が完勝した。

六万人の大観衆は重量ファードの激突に酔った。一進一退の攻防が繰り返され、点差は3対3のままだ。これは、前半戦に双方がペナルティーキックで得た3点で、後半戦のここまで全くの互角であった。後半十五分を過ぎた頃、激しいに肉弾戦の末、明治が縦の（直進の）鋭さで同社ゴールに迫った。だが、明治のバックスがボールを落とし、同大がこれを素早く拾い、自陣二十メートル付近からボールを廻しに廻して、明治バックスを振り切りトライを奪った。トライ後のゴールならず、同社が7対3とリードした。

攻めている側が点を取ることが出来ず、逆にトライを奪われたことは、明治選手に相当ショックを与えた筈だった。しかし、明治大は再び同社ゴールに2度、3度と突進した。同社大のヒフティーン（十五名）は自陣に釘付け状況となった――ボールが地面にある状

態で、双方の選手がもみ合うラックの場面であった。明治が押し合いに勝ち、ボールが明治側に出されるならトライのチャンスである。もみ合いは続いた。その時、高山レフリーは笛を吹き両校の選手を分けた。もちろん、この大歓声の中、笛の音が聞こえる訳がない。選手の動きから中断の笛が吹かれたことが解った。次の瞬間、高山レフリーは同社大の一人を指差し何事かを指示した。それが《退場処分》であるとはすぐに判らなかつた。同社大の右ウイング（背番号14番）島田選手は、一瞬、納得できないという様子を見せ、高山レフリーの方に一歩進んだ。高山レフリーは、右手でグラウンド通路方向を指した——判定に何らの躊躇をみせてはならないとのレフリーの強い意志がこめられていた。

ラクビーでは、レフリーへの異議申し立てや抗議は絶対あり得ない。あるとすれば、チームのキャプテンのみが《反則の説明》を求める確認行為である。

島田選手のラフプレーがどのようなものであつたか、の場内放送もなく、また同社大キャプテンの確認行為もなく試合は再開された。退場処分で一名減つた同社大は、ナンバーエイト（背番号8番）を14番に下げ、フールド勢を7名に減らし、明治《重戦車》の攻撃に立ち向かつた。だが明治は勢いづき、後半三十四分にスクラムトライ、同三十六分に連続トライを奪い、結局、試合は20対7で明治大の勝利となつた。

判定をめぐり、トラブルが日常化している、プロ野球などでは試合後も騒がしい。めつたに起こりえないラグビーの退場処分であつたために、翌日の各新聞で取り上げた。だが、関係者は総じて抑制したコメントであつた。高山レフリー談「密集の中で反則があり、笛を吹いた直後に、再び倒れているプレーヤーの体を踏みつけた行為に対し、直ちに退場処分を行つた」——島田選手談「無我夢中で突つ込んだ……ラフプレーになるような行為は……」——同志社大林田主将「今は頭の中が混乱していて、何がどうなのか分かりません。気持ちで負けていたかも知れませんが……」——今野ラグビー協会会長談「協会が認定したレフリーの処置だから、その判断について言うことはありません」——岡同志社大監督談「ラフプレーに対して心からお詫びします。深く反省して一から練りなおします」——これらの談話が、全体のプレー解説後に載せられるにとどまつた。賑々しくプレーヤー、観衆から意見を求めることもなく、呆然自失の島田選手を追いかけた記事もなかつた。

日本選手権の興奮がさめた一月下旬、ある週刊誌の片隅に「退場選手のその後」と題して短い記事が載つていた——これによれば、島田選手は試合後、ロッカー室でチームメイトに黙って頭を下げた後、一人で関西に帰つた。それから数日後、合宿所に一度だけ私物を

取りに来た。その際、退部届を居あわせた下級生に託していった。四年生であり、名門大学・ラグビー部員であったから、某企業に内定していたが、この就職を断念し、以後、彼の消息不明である」と書かれていた。

二

旧盆が過ぎたばかりなのに、高原の夕暮れに秋の訪れを感じた。予定を早めてよかった。一週間後に来たら、本当の秋を感じたかも知れない。矛盾だらけの自分だ・・・ラグビーは秋から始まるのに、その到来を心待ちしている一方、秋がかもし出すメランコリーを恐れているなんて・・・

吉村理恵子は二十六歳で、雑誌記者である。業界では中堅に位置した「進路社」に入社して三年余りたった。「進路社」は働く女性をターゲットとした『あゆみ』を主力誌に、月刊誌三誌と季刊誌二誌、文庫本の発行を行っている。理恵子は、早稲田大学文学部を優秀な成績で卒業し『あゆみ』を担当する部署に配置された。だが、作家や評論家への原稿依頼、テープ起こしが日常的で『あゆみ』の内容自体も、女性週刊誌と大差のない《有名人のスクランダル》や《セックスもの》に偏りがちであった。取材を含めて『雑誌記者』として独自の記事を書くのに飢えている時、苦しいことが起こった——愛を誓いあった男の裏切りをこの目で見てしまったこと・・・あの時の一週間、いや一ヶ月をどう過ごしたかは今でもよく分らない。もう二年半前になるが。

失恋の痛みが少し和らいだその年の十月の日曜日、あの男と腕を組んで歩いた道を辿ってみたのだ。そして何気なく銀杏並木から秩父宮ラグビー場に入ったのだった・・・その時は母校のチームは出場していなく気楽な観戦だったが、そこで見た若者の姿——自分とそんなに違わない若者たちのこんな世界があったとは・・・試合が終了するのを、ラグビーのみは《ノーサイド》と云うことを知り、なんともいえないすがすがしい気分になったのを覚えている。

その日から自分に元気がでたと思った。いや、意識的に《ラグビー観戦に》追い込んでいったと言うのが正しいだろう。土、日は出来るだけ時間を作りラグビーを見に行った。中でも母校の試合は全部観戦した。ラグビーを見れば見るほど、その素晴らしさが分ってきた・・・押され、攻められた側が一発のすばらしいタックルを決めて、一瞬のうちに攻撃する側に立つ、その妙・・・スピーディさ。格闘技でありながら、哲学的なものが含まれている。そう！《トライ》を取るためにはボールを後ろへ後ろへと素早く廻す・・・

云ってみれば急げば廻れだ——これは哲学的だし、楢田のボールが思わぬ方向に転がる——これこそ人の人生を暗示しているし、哲学的だと思う。

こんなラグビーに対する恵理子の思いを、記事にする機会が昨年暮れにやってきた——若い女性のラグビーファンが増えてきている・・・ラグビーの魅力をあこれ探って『あゆみ』に特集記事を書けることになった。恵理子は編集会議での発言を評価されたのか、編集長の指名で特集記事を任せられた。たった一年余りのラグビー場通いで『ラグビー通』に見られて、くすぐったい感じがしたが、初めて仕事らしい仕事をしたと思った。記事はかなりの反響を呼んだ——特集の一つに、ラグビーとプロ野球との魅力の比較を行い『プロ野球は二流のスポーツ』と展開した記事に、抗議の電話、ファックス、手紙が殺到した。

編集長は苦い顔をして、来月号で『お詫び』の記事を書くよう指示した。が、全体として特集記事は好評であった。『お詫び』記事とは別に『あゆみ』の半ページを使い、ラグビーのコーナーを設けることになった。全部の記事を恵理子が見て書いた。そして来月号で、『ラグビー合宿のメッカ・菅平特集』を計画し、その取材のために吉村恵理子は来たのである。

大学ラグビーの、その年の仕上がりが具合は、夏の合宿の出来不出来で決まると云われている。恵理子の母校のチームが若い女性の人気を博し、合宿取材も中心に据えてかまわなかった。——四年生が卒業し、入れ替わったメンバーの中で、急激に伸びている選手は？キャプテンの統率力は？一年生でレギュラーを獲得する選手は？スタンドオフ（背番号10番）が誰になるのか？大型ファードになったと云われるが実態はどうか？が取材のポイントである。また、記事は、地獄の特訓を受けている若者のあれこれを書き、女性の関心を引くように書かねばならないのだ。

昨夜、車で菅平入りした恵理子は、早朝から早稲田のグラウンドに行き、激しい練習を見学した。中抜けで二時間余り現場にいなかったが、ランニング、ランニングパス、スクラム、タックル、ラインアウト等激しい練習を見学し、気が付いた点をメモした。

選手達は、早い昼食とると、一時から実戦（オープン戦）で日体大とわたりあった。三本目（三軍）と二本目（二軍）は前半三十分、後半三十分の形式で、一本目（一軍）は通常の試合時間（前後半各四十分）で実戦試合を行った。恵理子はそれらの総てを見学し、夕刻に行われる監督のインタービューに備えた。

インタービューは、午後七時から菅平ホテルのテラスで行われる。

練習を終えたラグーマン達が合宿所に帰る姿が見える。あしを引きずって痛々しく歩く者も割りと多く、なかには、友の肩を借りて帰る者がいた。明日も元気で試練をくぐりなさい！弟たちよ！理恵子は心のなかでそんな叫びを発していた。そこに早稲田ラグビー部日野監督が現われた。「お疲れのところを申し訳ございません」理恵子は挨拶し早速質問に入った。それは日野監督も一瞬驚く内容だった。

「実は、今日午前中、早稲田の見学を中抜けし、ラグビー協会・レフリー合宿を覗いたのです・・・そこに、ある青年が来て、高山レフリーの入山を確かめていたのです。その青年とは、ここに来る前に再びすれ違ったので、余計印象に残っているのです。わたくし、監督を待つ間にふと思ったのです。《高山レフリーは一九九八年以降、笛を吹いていないのではないか》と。監督！高山さんのその後をご存知ですか？」日野監督は一瞬苦しい表情を見せ

「高山レフリーは、退場処分があった試合以降、一度も笛を吹いていないと思います。名レフリーとして協会でも必要な人だったけれども・・・詳しい経過は私にもわかりません」それ以上、この件の質問は酷だった。

それから一時間余りにわたって《母校チームの動向》《日本ラグビー界のこと》《ラグビーと他のスポーツ界との連携》等を語ってくれた——人気チームの監督であると同時に、日本ラグビー界を引っ張る人であることがよく解った・・・言葉の一つ一つに重みがあり『青少年教育』『世界平和』の視点を忘れず、ラグビーに打ち込んでいることに理恵子は感動した。

三

社ではビックニュースが待っていた。

編集長の山本は、理恵子が菅平のお土産・野沢づけを持って出張の挨拶を受けると「君の帰りを待っていたよ」と言っ、社外の喫茶店に誘った。山本のニヤニヤした表情が気になった。

「お見合いの話でしたら遠慮させていただきますけれど・・・」理恵子は席に着くなり先制の言葉を発した。

「そうじゃない！あの一件以来、君を諭すのは相当骨だと解っている。仕事のことだ。コーヒーを飲みながら聞いて・・・」そのくせ、コーヒーが運ばれてこない前に切り出した。

「実は、昨日、重役会議で正式にゴーサインがでたのだ！わが社から『ラグビーの雑誌』を

出版することになったんだ！この種の月刊誌が現在二誌しか発行されてなく、ラグビーファン増加のなか、営業面でもいけると踏んだのだ」山本はコーヒーをブラツクですすり「そこぞだ！」と口調を改めて

「君には大いに活躍願いたい。十二月に人員採用を考え、そうだなー二名だ・・・一月発行の方針だ。その前に、十二月に、ドカーンと別冊を出して欲しい。君は準備室のキャップとしてかかり切りになってくれたまえ。当面兼務で三名をつけるつもりだ。必要ならアルバイトになるけれど引っ張ってきてけっこうだ。この件は了解と言うことでいいね・・・」

「急に提案されても・・・別冊発行に関しても編集方針を出してもらえませんか・・・」

「君が案を作って編集会議にかけてくれたまえ」と、山本はイラついた。理恵子が飛び上がって喜ぶ姿を期待していたかもしれない。理恵子はそのことに気が付いた。

「編集長！ありがとうございます。期待に添えるよう全力でやってみます」

「そうでなくちゃあ、まあ、頼むよ、よろしく」

理恵子は三時になると社を抜け出した。もともと今日は夏休みの予定だったし『ラグビー誌』発行の件から、理恵子の行動を咎める上司、同僚はいない。

午前中、理恵子は、スポーツ東西社の中西記者に電話した。中西記者のラグビー記事は定評があった。理恵子も「スポーツ東西」をほとんど毎日駅の売店で購入し、中西記者のラグビー記事を読み『ラグビー通』の栄養源としていたのである。『あゆみ』のラグビー特集記事でもアドバイスを受けていた。記者が記者を取材したり、アドバイスを求めることは邪道かもしれない。だが、もともとこちらは素人であり、こういう場合の女性の強みを發揮して、情報を仕入れたのだ。

——中西記者には改めて御礼を述べて『出来れば本日会っていただけませんか』を申し入れた。結果、三時にラグビー協会で、今年度の試合日程表を受け取り、関係者と雑談した後、四時に会うこととなった。理恵子も臨時号との関連で、主な試合日程表を手に入れることを含めて協会に行き、その後、中西記者と近くの喫茶店で会談することとなった。

中西記者に菅平であったことを述べて、理恵子の推測——その青年は退場処分を受けた人ではないか・・・そして高山レフリー訪問の理由は、自分への処分以降、本当に高山レフリーが笛を吹くのを辞めてしまったかどうかを確かめに来たのではないか——を述べた。

中西記者はしばらく沈黙した後

「吉村さんの処で確かめ、記事にするお考えは・・・」

「今のところはありませぬ。記事以前に、高山さんの現状を知りませんと・・・」
「高山さんはあの日以来レフリーをやっています。協会への、公認申請を行っています」
「やはり・・・」

「私の知っていることと言えば、退場を命じられた選手・・・名前はなんと聞いたかな・・・島田だ。あの後、数日して退部届と合宿所を引き上げたそうです・・・ラグビー関係で内定した企業の就職は辞退し、別の会社に就職したが、半年後に退社したと、関西支社の知り合いが話したことがあります・・・高山さんは、筑波大学の講師だと思います」
「当事者にとってはそのほど深刻であったと言うことですね」

「高山レフリーのジャッジは称賛されてしかるべきです。本人も確信の揺らぎとかでなく、やはりラグビーだからですね。他の競技では恐らく考えられないでしょう」ここで、ふたりの会話中断した——自分が提起した話題だから、何かしゃべる必要があるが——

「高山さんを訪ねてみたらどうですか？ 住所、電話を調べますよ」
「ありがとうございます。機会を見てそうしたいと思います」

中西記者は携帯電話を取り出し、日本ラグビー協会の知り合いの職員を呼び出し、たどころに高山氏の知りたい情報を得た。

四

元レフリーであった高山氏を訪問する——だが、訪問の理由をどのように述べたらいいのか——菅平のことも自分の推測が入っているから理解が得られないのでは。「進路社員」を名乗ることは『取材』と受け止められる——電話ではダメだ、手紙にしよう、と考えているうちに電車を乗り過ぎそうになってしまい慌てった。理恵子の家は、新宿から伸びている私鉄で約五十分、東京と神奈川の境にある。

駅商店街のスーパー店で、赤と黄色のパブリカ、レッドオニオン、サラダ菜、イタリア直輸入のトマトの缶詰、同じくイタリア産のスパゲッティ、それにイタリアの赤ワインを購入した。今朝出かける時、久しぶりに理恵子が夕食を作ると、母に伝えたのである。その際の母の笑顔・・・何年ぶりかであった。

家は、駅前の商店街を通り、なだらかな坂を八分ぐらい登った見晴らしの良い場所にある。中古の家を買って都内から移り住んだ時、理恵子は大喜びした・・・十七年前であった。父の帰る時間を見計らって駅まで迎えに行き、並んで帰ってくるのが楽しみであった。その楽しみが順序に減り、遂に途絶えてしまった。理恵子が高校二年の時、父の中に何が

起こったのかを聞けぬまま、父は去っていった。大学入学時、お祝いの万年筆を買ってくれるのを機会に、新宿伊勢丹前で一年ぶりに会った。それをきっかけに、年に一、二回食事をするにしている。

——そんな感傷を振り払うように料理に集中した。ジャガイモを茹でて、ポテトサラダにして、サラダ菜と赤パブリカとレッドオニオンを添えた簡単なものに、これまた手軽に出来る『スパイシーなパスタ』である。オリーブオイルでニンク一片を炒め、香りが付いたところで取り出し、鷹の爪二房を、焦がさないよう軽く焦げ目を付け、ここに茹で上げた細めのパスタを入れ、トマトソースを入れかき混ぜるだけだ——良い香りがする。食欲前進だ。

赤ワインを飲んだ母は、普段より増して饒舌になり、さらにワインが進むと愚痴をこぼした——勤務先の生命保険会社の上司や同僚に対する不満、取引先の男性からの食事への誘いを断る良い方法を質問するので、自室に引き上げるタイミングがとれなかった——わたくし以外に、誰か愚痴を聞いてくれる秘都が現われなにかしら・・・時々、何もかもぶつけることができる人・・・不倫だったかまわらない。ああ、また一つ私の悩みが増えたわ。

理恵子は、保存してある『ラグビーファイト』の中から一九九X年二月を引き抜いた。この『ラグビーファイト』と競い合う雑誌を自分が先頭で創っていく——その時、自分はこの雑誌を買うだろうか？理恵子は苦笑した。とにかく今はこれを利用させてもらわなくては——雑誌の『読者のコーナー』を開いた。『退場事件に思うこと』『レフリー考』『がんばれ島田君』などの小見出しで、読者からの投書が載せられていた。

投書の中で、『これは』と思う個所に赤線を引いた。

『・・・テレビ放映を録画していたのを見たが、判然としない。審判が近くで「厳正な立場で観察していた筈」というたてまえから「何らかの不行跡」があったものと信用するほかないという《定め》がなんとなく哀しく思える』

『退場宣告は、当該チームに交代選手の出場を認めないという性格上、この宣告の瞬間、試合の帰趨は決したものと見えよう。《審判はゲームの演出者》とすれば、時には若い選手がエキサイトする場面があったとしても、それをうまくコントロールすべく慎重な配慮のもとに笛を吹き、ゲームの円滑な進行を図るのが演出者の役目と考えるのだが・・・』

『私は、君がこれからの人生で、トライを重ねてくれるだろうと思っています。そう考えれば、この明治戦が終了した時点で一つの試合が始まったともいえるのではないでしょう

か・・・それは君にとって辛い厳しいものかもしれない。もし、君が自暴自棄になったら、今度は本当に負けです。島田君、次の試合の始まりだ。これからキックオフ。位置につけ！」——理恵子自身、この投書を読んでいる筈であった。だが、活字を単に追ったのに過ぎなかった・・・母校の決勝進出に喜び、何年ぶりかの優勝を期待して深く考えなかったのだ。理恵子はまだまだラグビーについて解っていない！こんな状態の延長でラグビーの編集に関わるなんて・・・

気が重い日々が続いた。高山元レフリーへの手紙を書き始め、それを二度まで途中で破った。電話をかけようとして最後の一押しで止めてしまったことが三回あった。理恵子のちぐはぐな行動を、同僚が気づいたみたいだ。『ラグビー誌××』の創刊準備号レジメの準備も不十分なまま終わっている。十時に山本編集長の声がかかった。会議室の席に着くと、チームリーダーになる理恵子に司会・進行が任された。

「十二月上旬といいますと、ラグビーの時期は、早明戦があります。そして、大学選手権一回戦に名乗りをあげるチーム、また、社会人大会も同様です・・・この時期、いくつかの新聞社や雑誌社が、同様の企画を持って発行するものと考えておくべきだと思います。ただし、似たりよったりの傾向で、人気チームのプレイヤーを追った企画が目玉ですから、わが社の場合はそんな企画でなく、もっと地味なもの、どろ臭いものを狙った方が・・・」理恵子の冒頭の説明をさえぎるように、編集長が述べた。

「スタープレイヤーを追いかけたものがどうしていけないのかね？」

「いけないとは言っていないません。要は、ラグビーの場合、スタープレイヤーが存在することでも必要ですけど、スタープレイヤーの活躍だけで勝てる保証はどこにもないのです。もつと別の要素が、15名が、いやチームが一つにならないと駄目なのです」

「言いたいことが、分るようで分らない！」

「皆さんごめんなさい！私ばかり発言して・・・≪ラグビーの真髄はなにか≫は、私もそうですけれど、皆さんにも分っていないと思うのです。恐らく現役のプレイヤーの多くも・・・それを諸々の角度から探ってみる——ラグビー発祥の地や歴史を辿ることや、ラグビーはどのように鍛えられるのか！公式戦に一度も出場することなく黙々と練習する若者の姿を追うなかから、ラグビーと云うものが分るでしょう。すみません。これが最後です。≪プロ野球は二流のスポーツ≫と批判しました。二流のスポーツがあれだけ盛んなことは、ラグビーファンにとって歓迎すべきことです。今では、ビックゲームのチケットを手に入れるの

は大変なのです」

「だいぶ展開したね。吉村君の意見に対して、または別の角度からでも意見があったら出したらまえ。どうかね」同僚からは沈黙が続いた。編集長はたまらず、二名を指名し、発言を促した。それでも意見が出ず、二日後に再討議をすることとした。

自席に戻った理恵子にタイミング良く電話が入った。中西記者からであった。

——実は、あの同社大の島田ことなんですが・・・わたくしも気になりました、同社のOB連中にあたりました。それで判りました。彼はS社を辞めた後、家業の書店を病気の父親に代わって切り廻しているようです。合間に、地域の少年ラグビーチームをやっているそうです。どうです吉村さん！連絡してみませんか・・・

連絡先は滋賀県××市×町××番地です。

四

進学や就職を巡る競争、仕事や出世における同僚との競い合い、愛を得んがための競争（と言うよりか争い）それ等の競争に敗れた者の悲哀は日常的だ。一方、スポーツにおける敗者はどうなのか・・・理恵子は考える。

——人間が創りだした文化の一つであるスポーツは、本来、人間の生活を豊かにし、仲間意識を高め限らない未来を展望した筈だ・・・だが、スポーツに、勝者も敗者も生み出さないように仕向けた途端、それはスポーツでなくなるという命題を持つのだ。そこから、競争に勝ち抜き、勝利を手中にすることが先行し、人間自身を無視する傾向が強まってきたのだ・・・従って、スポーツの敗者は二重意味で人間性無視の仕打ちを受けていると言えるのではないか・・・

——自分は、ラグビーの《ノーサイド精神》に、スポーツの救いを見た気がする。もし、あるラグーマンが述べたと云われる《ノーサイドは勝者のためのノーサイドであって、敗者のためにノーサイドはない》ということが全体化するのなら、自分はラグビーときょうならするであろう。大丈夫だ。ラグビー界はノーサイド精神を生かし続けている。このことを確認する上から『退場処分』の当事者に接しようとしているのだ。

突然、このような手紙を受け取り、戸惑い・お怒りを感じられましたら

幾重にもお詫びいたします。

八月十七日、時刻は午前十時頃、島田さんは菅平の日本ラグビー協会の

『レフリー合宿』グラウンドを訊ねられましたね？

くしくも、島田さんが、日本ラグビー協会の職員に声をかけられた時に、側にいたものです。

わたくし、同封した名詞の通り雑誌記者です。当然、取材の一環としてこの手紙を出したとお考えでしょう。そうでないことを明言させて頂きます。

私はラグビーを愛し、もっとその深さを知りたい（残念ながらプレーは出来ずに見ることを通して）と願う立場からのあつかましい提案なのです。

お願いです。

高山元レフリーに会ってください。

余計なことを言うな、それは計画中だ、とおっしゃるならそれで結構なのです。

島田さんが、菅平まで行き、高山さんに会う努力をされました・・・また、日常的に、地域の少年ラグビー発展のために奮闘されていらっしゃる。

そのことだけでも島田さんは、あの日のことを教訓化されました・・・

その事実を一刻も早く高山さんに知らせてあげてください。

笛を吹いたレフリーが、笛にコントロールされたプレーヤーと、ラグビーについて語ることも『ノーサイド精神』であると思います。

重ね重ねの失礼お許しください。

また高山さんの連絡先を記すことの一切の責任をわたくしが負います。

自宅 郵便番号三〇二・〇〇二三 取手市×町×丁目×番三号

高山秀雄 様

電話番号（〇二七七）×× ××××

吉村理恵子

島田 元様

理恵子は、島田元への手紙投函後しばしば後悔の念にかられた・・・自分の勝手な判断は、

島田自身の『心の整理』を乱すことにならないかと——そんな葛藤の一週間後、待ちにまいった島田元からの返信が寄せられた。

吉村理恵子様

お手紙ありがとうございます。

私はあの××年一月二日以来、日に何度も、時には真夜中に飛び起きることがありました——この出来事よ！どうか消えて無くなってくれ！神よ！この過去を抹殺してくださいるなら、私はなんだってします。お願いです！私の試練としたらあまりにも酷です、と叫んだものです。

以前読んだ本の中にこんな言葉が記されていました『不幸な時に、幸福な時を思い出すとほど苦しいことはない』と。

この苦しみを抜け出すのに、どの位の日々が必要だったかを述べることは出来ません……まだ苦しみは続いていると言えます。だんだん苦しい夜を迎えなくなったのは事実ですが。

ラグーはトイメン（自分のマークし、同時にマークされる相手）との競り合いに絶対勝とう！負けてはいけない！と鍛えられました。しかし、自分に限ってみれば、内なる自分とあい対し、ラグーとして、人間として成長することに手を抜いたのではなかったかと……

私がこの反省点に立ったのは、半年で会社を退職して、いやいやながら父の仕事——書店の手伝いを始めた直後でした。河の土手を散歩していると、河原で中、高校生がラグビーの練習をしているのに出会いました……河原のグラウンドは野球優先で、後で知ったことですが、ラグビーコーチも土、日曜日しか見てもらえない状況でした……平日はランニングとパスの練習しかしてはならないとが判りました。私は午後四時頃の散歩を日常化するようになり、そしてある日、中、高校生の練習に加わるようになり、コーチの手伝いまでするようになっていったのです——少年達に少しずつ教えることのなかで、自分自身も身につけてないことを理解する過程となったのです。

吉村さんにアドバイスいただきました、高山先生にお会いする件、近い将来必ず行きます。

今年の夏、思いたって菅平に挨拶に伺ったのですが、高山先生はお見えでなく、氏への打撃がそれほどまでに大きいことに、改めて考えせられました——もっと自分を鍛えてお会いしたいと考えます。

いろいろありがとうございます。

一九九×年九月二〇日

島田 元

幸せな毎日、苦労や悩み・悲しみと無縁な人生を送っている人間なんてほんの一握りだ。その幸せだって、砕いてみたら、魅力のない薄ペラな人物像がちらちらして、がっかりであらう。

大試合の出場選手として懸命にプレーしていた者が、ほんの一瞬のプレーが反則と指弾され、暗黒の中に叩き込まれた——暗闇のなかで思い起こすこしは輝いていた自己の姿・・・それ故、暗黒の自己の姿はみじめだ・・・そこから這い上がることは《試合がさかのぼって再開されること無い限りあり得ない》に等しい。絶望—墮落—絶望の再生産のパターンだ。

だが、この青年は突破した！見過ごしがちな小さなものに目を向けることのみなかで。

高山秀雄様

突然、このような手紙を出すことの失礼をお許しください。

公平なジャジで定評のあった、高山さんの姿が見られないことは寂しい限りです。

高山さんが、まだ現役であった頃（このような表現は失礼にあたりましようか・・・）私の左隣のスタンドで観戦されていたのをお見かけしました。

試合後に質問を持って伺うことを考えたものでした。

質問の中味はこうです。

——私たち「第三者的立場から試合を見ていて、割りと試合の流れみたいなのが読み取れることがあると想います。そこから、今のスタンドオフのキックは何だ！オープン攻撃にすべきだった——どう判断したのかと。時には怒りを感じるのです。しかし、冷静に考えてみますと、プレーヤーは、状況を瞬間に判断し《そうあるべきだ》《そうしななければならない》と確信してプレーしているのだから《この差》はどうしようもないのでは、とも思うのです。仮に《スポーツする者》と《スポーツを観戦する者たち》の差をなくすため、ゲームの組み立ての細部のところまで、コンピュータを使うなどしたら、双方にとって堪えがたい結果をもたらすのではないかと——

質問の趣旨は解っていただけたでしょうか・・・

実は、同志社大WTB（ウイング）であった島田さんのことです。

公正かつ毅然たるジャジによって《退場処分》を受けた選手があった——大試合故にその選手は責任をとる方法を見つけられぬまま、学園から去り、就職先からも去った。この一時逃れが二度、三度と続くなら《永遠の退場処分者》となるでしょう。

島田選手はプレーに復帰したのです！

現在、家業を継ぎながら、中、高校生のラグビーチームのコーチをしているのです。

問題は判定を下したレフリーの復帰はいつか、と云うことです。

当事者ばかりでなく、ラグビーをこよなく愛する人々の関心事です。

重ね々々失礼お許しください。

一九九八年九月二十七日

吉村理恵子

「で、その元プレーヤーと元レフリーが対面するもの記事にするのかね？」

「編集長！ストレートに考えないでください。お二人に誤解を受けたならば、即、実現不能になります。要は、私達のいやわたくしの夢なのです！夢のなかで掴んだことはおすそ分けしますから、記事のことはおっしゃらないでください」

「解った！ところで、高山さんはレフリーに復帰するのかね？」

「三年間のブランクがあるので難しいでしょう。高山さんは、プレーヤーたちの尊敬を集められなかったと総括して、レフリーを養成する仕事を始めることを考えているみたいですよ」

「おれにはラグビー野郎が理解できない」

「それでよいのです」

「よいとはどういうことだ！」

「さまざまなスポーツがはびこり、それ自体は喜ぶことなのですけれど、競争の激化、勝利を重視することを追い求め、故意にルールすれすれのプレーをしています・・・観客だつて暴力行為を求めている始末です。何か一つぐらい、ルールに徹底的なスポーツがあつてしかるべきです」

「それがラグビーであると云う主張はよい。おれが解らないと言ったのは違うぞ」

「ラグビーが聖なるグラウンドで、いや、グラウンドをでても、あの中世の騎士が王女に接したの
ように、献身的に振舞うとすれば素晴らしいことですね」

「ああ、君のラグビー論を聴くと頭が痛くなる。ラグビーの別冊のことたのむよ！」
——また編集長を怒らせてしまった。少しご機嫌をとってあげなければ。自席に戻ってか
ら理恵子は考えた・・・そうだ！十二月の第一日曜日に行われる早明戦に編集長も誘おう。
だが待って・・・その後を実現する《高山さん、島田さん会谈》に、おれも同席したいな
んて言い出しかねない。その時はその時だ！

完

昨今、日本ラグビーは『日本代表監督』をはじめ、トップリーグの各チーム、そ
の下のトップイーストなどの地域リーグまで、外国選手が多数存在している。元オ
ールブラック、元南アフリカ代表選手など世界的選手が多数活躍し、日本選手のレ
ベルを格上げしている。そして、日本代表選手の半数はこれら外国の選手から選ば
れている。これは、ラグビーの国際組織がルールで認めていることである。
問題は《格闘技》である故の、激しいプレーによる『反則』の多さである。体を張
ったプレーを追及する故に、相対的に外国選手が多い。

一発退場こそめつたにないが、重なる反則（2回、3回）には10分間の退場が命
じられる。これをシンビンと言う。

筆者